Hack For Japan + Code for Japan

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第106回

エンジニアと地域の新しい関係、ブリゲードを紹介します

●CODE for GIFU 代表
石井 哲治（いしい てつじ）

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）をきっかけに、「自分にも何かできることはないか」とシビックテックに興味をもって活動に参加してくれるエンジニアやデザイナーの人たちが増えています。

しかし、全国的な災害時だけでなく、普段の日常でもさまざまな課題があります。とくに地方では人口の流出から、中心部にある商店街が廃れたり、公共交通が維持できずに高齢者の移動手段がなくなったりしています。また、新型コロナ感染状況の拡大に伴って、観光やインバウンドも厳しい事態になってきています。そんな地域のさまざまな課題解決に取り組んでいるブリゲード（Brigade：消防団）を紹介します。

ブリゲードとは？

ITで地域課題の解決に挑戦するCode for X（地域名）が**図1**のように全国で活動しており、この各団体のことをブリゲードと呼んでいます[注1]。

ブリゲードの形はさまざまで、Code for Japanと同様に一般社団法人化していたり、NPO法人化していたりする地域もあれば、任意団体で活動している

注1　https://www.code4japan.org/brigade

▼図1　各地のCode for X

地域もあります。また活動地域も県単位や市区町村単位、街単位とさまざまです。参加するメンバーもエンジニアが中心のところもあれば、大学関係者が多いところもあり、子育てに興味がある女性を中心としたところもあります。

このようにさまざまな形態があるのは、シビックテックにとっては組織のかたちが大事なのではなく、自発的な行動が大事であるからと言えます。したがって、ブリゲードはCode for Japanの下部組織というかたちを取っていません。それぞれが対等の立場であり、守備範囲が違うだけなのです。自分たちの住んでいる地域にブリゲードがないからといってCode for Japanに作ってほしいという依頼をすることはありませんし、Code for Japanから各地のブリゲードに問題解決を指示できるわけでもありません。各地のブリゲードは自発的に発生し、それぞれの想いをもって活動しているのです。

シビックテックの理念が、テクノロジをもって市民があるべき姿を考え課題をともに解決していくことだとするなら、中央のトップダウンではない地域のボトムアップな成り立ちが大切だと思います。

各地のブリゲード紹介

Code for Kanazawa

石川県金沢市を中心として石川県全域をカバーするCode for Kanazawaは、日本で初めて設立されたブリゲードです。2012年夏より準備を始め、2013年5月に9人で設立しました。2014年には一般社団法人化され、現在100名以上のプロジェクトメンバーが参加しています。

立ち上げ当初は国内でのシビックテック事例は皆無であったため、活動内容が周囲から理解されずに苦労されたそうです。活動内容を知ってもらうために、金沢市で当時課題となっていたいくつかの候補から、ごみの分別収集日をわかりやすくするアプリを開発（**図2**）。ソースコードはGitHubに公開しており、各地のブリゲードや個人を中心にフォークされ120都市以上に展開されています。

▼図2　ごみの分別収集日をわかりやすくする「5374.jp」

また、広く市民の方が集まって地域課題やシビックテックについての議論やものづくりを継続的に行える場の提供も行っています。毎月第2木曜日にCivic Hack Night（シビックハックナイト）を開催したり、初めて参加する方には初心者テーブルを用意したりと、きめ細やかにシビックテックや地域課題について一緒に考える機会を設けています。

筆者も何度か金沢を訪問したことがありますが、歴史を感じる街並みと新しい都市のデザインが融合していて、暮らしている方も誇りを持っているように感じました。日本で初めてシビックテックが生まれた街として納得がいきます。また、筆者はCode for Kanazawaの「コードで世界をHappyに」というコンセプトがとても好きです。

Code for Saga

佐賀県全域を活動範囲とするCode for Sagaは、オープンデータを活用した地域の課題解決をメインに活動すること、技術者だけのコミュニティにならないようコードが書ける人もそうでない人も広く参加できるコミュニティづくりをすること、ウィキペディアタウン事業のように市民が参加しデータを作り出していく要素を活動に盛り込むことを活動の方針として、2014年2月に設立されました（**図3**）。2017年には佐賀で地域情報化の活動を20年続けてきたNPO法人「NetComさが」から屋号をCode for Sagaに変えて、活動を継承しています。

企画されるイベント内容が秀逸で、有田焼をテーマにしたアイデアソン、名護屋城のマッピングパーティ、佐賀ラーメンの食べ歩きオープンデータづく

▼図3　Code for Sagaのロゴとコンセプト。九州の中心が佐賀であるかのようなデザインで少しざわついたとか

りと、地元の要素を盛り込みつつ、エンジニアだけでなく市民が参加しやすい雰囲気づくりを行っています。

みんなで楽しむことを中心としながら、オープンデータの活用や地元への誇りを持ってもらうことも目指しており、筆者が住んでいる岐阜と地域性も似ているため、いつも活動の参考にさせてもらっています。

Code for Sagaの定例会では開始から1時間経つと議題の途中であっても自動的にビールを配って飲み会が始まるというおもしろいルールがあります。

Code for Ikoma

奈良県生駒市で活動しているCode for Ikomaは、市民活動団体として2014年1月から活動を開始しています。エンジニアとデザイナーが中心となっている10名程度の運営委員会のメンバーと学生、公務員、主婦、市議会議員などのさまざまな参加者で構成されています。

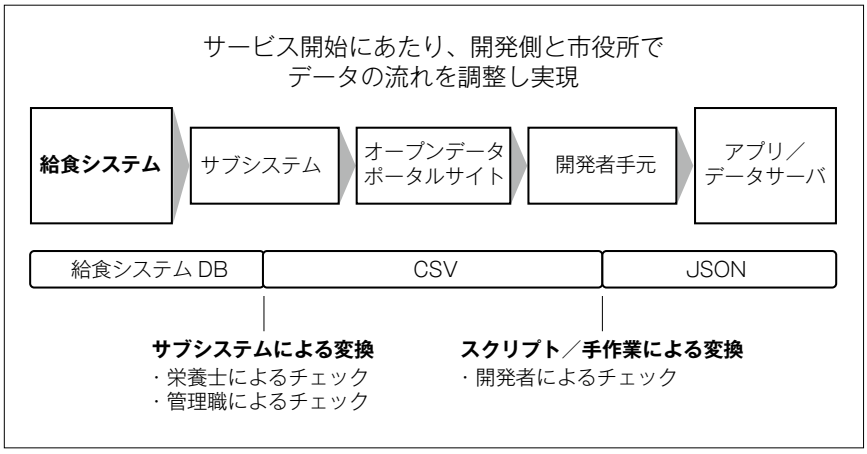
コミュニティ運営のポリシーとして、各自がやりたいことをやる、活動できるときに活動する、上下関係のないフラットな場にする、活動内容や成果物をオープンにする、ということを掲げています。

2016年に生駒市主催で開催されたIkoma Civic Tech Awardは「生駒の地域課題解決」「生駒の魅力発信」をテーマにアプリやWebサービス・アイデアを募集し、優秀な作品を表彰するコンテストです。Code for Ikomaはこのイベント運営にも関わっています。コンテストで最優秀賞を受賞した、学校給食の献立、アレルゲン、栄養バランスなどを確認するアプリ「4919 for IKOMA」を開発した際は、サービス開始にあたってアプリ開発者と市役所でオープンデータの運用フローを含めて調整し、実現したとのことです(**図4**)。官民連携の新しいカタチではないでしょうか。

また、Code for Ikomaは市民のパワーがすごいです。筆者が子育てアプリのアイデアソンのイベントに参加したときは参加者20名弱で、100枚以上のアイデアスケッチが出され、当時の副市長も挨拶に来ていました。街全体がシビックテックに向いているように感じました。

さらに生駒市自体がおもしろい自治体であり、公務員も多様な経歴を持った方が多い印象があります。Code for Ikomaの活動をきっかけに公務員になった方もいるくらいで、地域の元気さというのは人口の多さだけでは測れないですね。

▼図4　学校給食アプリのオープンデータ運用フロー



CODE for GIFU

最後に筆者の参加しているCode for GIFUを紹介します。2013年度の岐阜県オープンデータ事業の受け皿として2013年11月に設立し、活動範囲は岐阜県全域です。活動のポリシーは「お天道様に恥じない活動を行う」こと。テクノロジを使って身の回りの困りごとを自分たちの手で解決しています。

特徴としては「小さなIT相談室」として、ITの困りごとや関心のあるテーマについて少人数で集まるイベントを月1回程度行っています。IT系のイベントは、知らない人にとっては参加のハードルが高いため、そのハードルを少しでも下げていくために始めました。ほかにもメンバーに編み物が得意な人や星の写真を撮る人がいるので、そういった得意なこと、好きなことを活かすために手芸部や天文部といった部活動もあります。

写真1はCode for GIFUの活動の中で一番好きなシーンです。イベントのフライヤーを作成したときに登壇者名に誤字が見つかったのですが、すでに発注が取り消せない状態になっていました。慌てて誤字を修正するステッカーを作成して、集まれる人でフライヤーを修正しました。課題が見つかったときに文句をいうのではなく、みんなでリカバリーをしていくことってまさにシビックテックですよね。

紹介したブリゲード以外にも、月替わり代表制をとっているCode for Nagoya、アクセシビリティに特化しているCode for Nerima、女性エンジニアが代表になり再始動したCode for Fukuokaなど、さまざまなブリゲードが存在します。

▼写真1　フライヤーに誤字を見つけて、みんなで修正しているところ

エンジニアと地域の関わり方

テクノロジを使って自分の住んでいる地域を自分で住みやすく変えていけることが醍醐味（だいごみ）だと思います。ただ、自分1人だと変えていくことは難しいことですし、何から手を付けていいのかわからないこともあります。そんなときはあなたの身近にも存在しているブリゲードの活動に参加してみることをお勧めします。各地域のブリゲードは多様でオープンな活動をしており、常に新しく参加してくれる人を待ち望んでいます。活動に参加することで、地域のことをよく知ることができるようになり、さらに自分の住んでいる地域が好きになります。

そうやって人がつながり、活動がつながり、地域のあたりまえの中に解決するヒントを集めることができれば、きっと大きな力になっていくでしょう。新型コロナウイルス感染症の対策サイトが全国に広がるスピードが速かったのも、ブリゲードで普段から地域で活動しているからこそだったと思います。

自分の興味あることが大切

ただ、地域の活動に参加したからといって、すぐに結果が出るようなことは少ないです。仕事や生活以外の時間を使ってできることも限られてきますので、せっかく自分の貴重な時間を使うのであれば、自分の興味あることを見つけることが大切です。

興味があれば活動自体に参加する意欲も湧きやすいですし、継続しやすいです。継続していれば仲間も見つかり、モチベーションも高まります。また、普段の仕事では関われない技術に取り組んでみるのも良いでしょう。筆者の例でいうと、オープンデータの普及・活用に興味があり、高1の息子のために岐阜を住みやすい街にしたいと思っています。

地域の課題を解決しようとする中で、さまざまな人々と意見を交わすことができるのもシビックテックの特徴です。多角的な視点をもつことで、ITは生産性向上だけが目的ではないことに気づき、エンジニアとして新しい価値を提供できるでしょう。SD